

著 緒利

画 憂姫はぐれ

原作 エフォルダムソフト

エル 誓いの ちか



ぶちばら文庫

登場人物



藤守 要 (ふじもり かなめ)

騎士を志し、白宮学園に入学した青年。入学早々試験騎士団に入団することになった。困っている人を見過ごせない性格。



かざま あかり
風間 明莉

奨学生枠で白宮学園に入学した要のクラスメート。ポジティブな性格で、エスクワイアのムードメーカー。



ふじもり ゆずろ
藤守 由宇

要の妹で、飛び級で同じ学年となった。おとなしい性格だが、要と二人きりの時はすぐ甘えたがる。



くになか かおり
国中 佳織

従騎士団エスクワイアの団長で、白宮学園の三年生。穏やかな性格でしっかり者だが、私生活はずばら。



しどろ まな
獅堂 真奈

獅堂グループ社長令嬢で、自己成長の想いから騎士を目指す。面倒見の良い性格で、料理の腕はピカー。



エルフェン
ハーヴェンス

ウィルブルグ王国からの留学生で、新入生ながら帯刀が許可されている。生真面目な性格だが、可愛らしいものを好む一面もある。

が女で、お前と誓いを交わしたのも私だと理解しただろう。二度と間違えたりするな」
 要に背を向け、ぎこちない動きで掃除を再開するエルシア。
 「なんだか、可愛いなあ……」
 赤く染まった耳たぶを後ろから眺めながら、要は思った。

宝剣泥棒事件を解決に導いたのは、いくつかの偶然が重なったからで、エスクワイアにとって実力以上の成果だ。これからも驕ることなく、気を引き締めて鍛錬を続ける必要がある。

というわけで、要はエルシアに誘われ、稽古場で剣術の特訓をしているのだが……。
 「やはり、構えの時点で軸がずれているな。これでは全身の力を剣に伝えられない」
 剣を構えた要の背中に張りつくようにして、エルシアが構えを直してくる。

「あー、あのさ……」

「じつとしていろ。正しい構えを教えられないだろう」

「いや、そうしたいのは山々なんだけど……この状態はいかがなものだろうか」

この前の事件で、エルシアは要の戦い方に一定の理解は示してくれるようになった。

それでも、「正道を学ぶことは決してマイナスにはならない」とか言って、正統派の剣術を仕込まれることになったのだが……この体勢は、男としてつらい。

背中に伝わる温もりが集中力を根こそぎ奪っていく

「何の問題がある？　こうでもしなければ、正確な構えが伝えられない」

ぶに。二つのたわわな果実が背中に当たっていて、正直剣術どころではない。

「ほら、また軸がずれているぞ。両足の間隔は開いてだな……」

「うっ……くう、こ、これでいいのか？　逆に足が突っ張りそうなんだけど……」

「お前は力を入れ過ぎだ。いつものように力を抜いて……私が支えた方がよさそうだな」

「み、密着し過ぎ……」

む、胸が潰れてる……背中であふにふにしている……。だけど、真面目に教えようとしてくれているエルシアに、おっぱいの感触が……なんて、とても言えない。

エルシアの熱心な指導は続いたが、要は体内の血流を制御するだけで精一杯で、残念ながらほとんど頭に入らなかった。

それから実戦形式で手合わせして、稽古場を引き上げようとしたときだった。

「ん？　待て。怪我をしているぞ」

エルシアの指摘で腕を下げてみると、指先がすつと一直線に切れて、血が滴っていた。

「剣を弾かれた時かな。受け損なったのかも」



刃を潰しているとは言え、一定の剣速があれば十分に刃物と化す。エルシアの剣速があれば、容易い芸当だろう。

「すまない。稽古で怪我をさせてしまうとは……」

「言われるまで気づかなかったぐらいだし、このぐらい舐めときゃ治るよ」

「舐めときゃ……わかった。私に任せておけ」

言うや否や、エルシアは要の手を取り、傷ついた指先を口元に運んだ。

「んっ、ちゅ……」

「えっ……!」

指先を咥えられ、要は驚いた。エルシアはそのまま血を拭い取るように舐め、ちゅぷちゅぷと舌を指に絡ませてくる。

くすぐったいような、もつとして欲しいような、ゾワゾワした感覚が指先から走る。

（こ、これは……なかなか……）

やがてエルシアが指を口から出したときには、思わず名残惜しい顔をしてしまった。

「ん……? まだ舐めて欲しいところでもあるのか?」

「あ、いや、そうじゃなくて……」黙っているか悩むが、一応言ってみる。「こういうのって、普通自分で舐めるものなんだけど」

しばしの沈黙のあと、エルシアはカァァッと顔を赤くした。

「さ、先に言え、そういうことはっ！」
プリプリ怒って大股で歩いて出て行くエルシアは、
やっぱりなんだか可愛かった。



エルシアが立ち上がって頭を下げた。

「うん、気にしないで。私も要が選んだ子を見たかったから。エルシアさん、要のこと、これからもよろしく願います」

「はい、もちろんです！」

「ふふ。二人とも、今日はありがとね。それじゃ！」

母親は明るい笑みを浮かべながら手を振り、リビングから出て行った。

「素敵な方だな……要の母上は」

「そうかな」

母親を褒められると照れくさいが、嬉しい。

由宇が生まれてまもなく、父親は事故で他界した。要と由宇を女手一つで育ててくれた、自慢の母だ。

「ともあれ挨拶は済んだし、後はのんびりしよう」

「そう言われても困る。要の実家だと思うと、妙に落ち着かない」

「今は二人きりなんだから、気を使わなくていいって。お茶、入れ直してくるよ」

「お茶なら、私が……うつ」

ピシッと、エルシアの表情が固まった。

「ど、どうした？」

「あ、足が痺れた……」

「……無理に正座なんてするから」

日本人でないエルシアは、正座に慣れていないのだ。

「れ、礼儀を欠いては、要の恋人として失礼に……こ、この痺れはなかなか……」

「思わず突っきたくなる悶え方だけど、怒られそうだからやめておくよ」

要がお茶を持って戻ったときには、エルシアもだいぶ回復していた。

「お前は、ここで毎日を過ごしていたんだな」

お茶を手に、感慨深そうに言って、周囲を見回す。相当緊張していたようだが、ようやく落ち着いてきたようだ。

「こうして二人きりでいられる時間が心地いい。寮ではどうしても皆の目があるからな」

「でも、今は誰もいない。この家には俺とシアだけだ」

要はエルシアの手を握った。どちらからともなく、唇が合さる。

「んっ、んんう……お前の実家で、このようなこと……」

「でも、シアだってキスしたかったんだろ？」

「私だって、お前と触れ合いたい……しかし、時と場所を考えなくては……んっ……」

無粋な言葉を吐く唇を、今度は明確に要から塞ぐ。そしてそのまま、エルシアを押し倒そうとしたが……。



「ま、待ってくれ」

「……ダメか？」

「そうではない……ただ、この前は私がしてもらえばかりだったから……今度は、私が……その、要を気持ちよく……」

こんな嬉しい申し出を断る道理はなかった。

「それじゃあ、お願いしようかな」

「ああ、任せてくれ。私も、男女の情事について、少しだけ……勉強したのだ」

「べ、勉強っ？」

恥ずかしそうに視線を逸らしながら、エルシアは自分から制服をはだけていく。

目の前で好きな女の肌が露わになっていくという事態に、要の下半身はすぐに痛いほど自己主張はじめた。

ソファに腰掛けた要の脚の間に入る形で、エルシアが座る。窮屈なズボンの中からイチモツを解放させると、エルシアはかあつと頬を赤くした。

「私も初めてのことだから、気持ちよくなくても文句は受けつけないぞ」

「シアがしてくれるのなら、気持ちいいに決まってる」

「ぜ、善処はしてみよう……んっ……」

エルシアはおずおずと自分の胸でイチモツを挟んだ。そして両手を自分の胸の両脇に添

え、圧力を加えてくる。

「おおっ……」

処女腔に包まれたときのような鮮烈な快感はないが、ひしゃげた乳房の間から自分のペニスの先端が覗いているのを見てみると、要はものすごく興奮してしまう。

「汗の臭いならまだしも、この生臭さはなんだ……目眩がしそうだ……」

むにつむにつと、控えめな動きでパイズリがはじまった。お互いの体温を重ねるように、ゆっくりとした奉仕だ。

「あんまり毛嫌いしないでくれよ……」

「お前のものでなければ……はっ、んん……見たくもない……はっ……」

イチモツは、豊満かつ張りのある胸で包まれて、皮を剥かれるように扱かれている。肌がじんわりと汗で湿ってはいるものの、滑りが足りないために引つ張られる感覚がある。

「もしかして……気持ちよく、ないのか？」

「そんなことないよ。けど、まだ余裕がある感じかな？ シアも一生懸命で可愛いし」

「……こうなったら、こちらでも使わせてもらう」

自分が恥ずかしさを押し殺して頑張っているのに、気持ちよくできていないことが悔しかったのか、エルシアは亀頭だけ覗かせているイチモツに顔を近づけた。

「これどうだっ……んちゅっ」

「うあっ！」

大きく膨らんだ亀頭に、舌先が触れた。そのままチロチロと舐められ、要は思わず腰を震わせる。

「んんう、苦い……ベトベトして、お前の臭いに、むせてしまいそうだ……ちゅ……」

一度舌をつけたことで、行為への戸惑いが消えたのか、軽く、ついはむようなキスを交ぜてくる。

「くううっ!?」

エルシアの舌が尿道口に食い込んだ瞬間、ぞくりとした快感が走った。

「ふふふ、ここが気持ちいいんだな……？」 お前の弱点を見つけたぞ」

勝ち気な表情を浮かべ、ここぞとばかりに何度も尿道口を刺激するエルシア。要が快感に耐える姿を見るのが楽しいらしく、何度も上目遣いで反応を確かめてくる。

「私の胸でびくびくしてるぞ……舐める度に震えて、ふふ、そんなに気持ちがいいか」

尿道口から漏れ出る我慢汁を舐め取り、エルシアは唾液ごと嚥下していく。

一方要は、何か言われても受け答えする余裕がなくなってきた。リズムカルに行われる乳房の上下運動と、ねっとりとした亀頭に絡みつく舌……ざわざわと腰の辺りに、快感の大海が押し寄せてくるのがわかる。

「くっ、そんな顔されると……ふわぁ……ちゅっ、んんっ……」

ぶちばら文庫

恋騎士Purely☆Kiss エルシアの誓い

2012年 1月30日 初版第1刷発行

■著 者 緒利
■イラスト 憂姫はぐれ
■原 作 エフォルダムソフト

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©ORI © 2011 effordomsoft

Printed in Japan 2012

PPQ41

既刊案内

好評発売中

ぶちばら文庫17

沖田和彦 著

熊虎たつみ 画

Parthenon 原作

定価 670円(税込)

「熊虎たつみ」による
描き下ろし挿絵も収録!



妹天使と
子作りしちゃう!

天界非公認セックスで、愛する妹を救え!

いもうと 妹
はちまきセックス

 ぶちばら文庫
creative

それでも 水着は 脱がさない!

Soredemo
Mizugi
Ha
Nugasanai!

好評発売中

偶然当たった沖縄旅行。憧れの水無瀬まどかにつきあい始め、幸せ絶頂だった康祐は、迷わず決意を固めた。この旅行中に、まどかと初エッチをするのだ。だが、行きか艦内で出会った陽子に初体験を手伝ってもらったことで、ふたりの旅行は誘惑の連続になってしまった。意外と巨乳だったまどかの水着姿に感動しつつ、大人な陽子にも惹かれる康祐は、水着エッチの毎日!

ぶちばら文庫23
玉城琴也 著
珈琲貴族 画
定価 670円(税込)

真夏の天使たちよ…
脱いじゃダメ!
絶対!